
特務部隊はシャーマン！？

秋月秋代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特務部隊はシャーマン！？

【Nコード】

N4471Z

【作者名】

秋月秋代

【あらすじ】

転生者はシャーマンの続きモノ。

光ルートです。

更新は不定期です。
かなり遅くなる予定。

「第零廻」 プロローグ

三人称

時空管理局地上本部、レジアス・ゲイズ少将は嘆いていた。

ミッドチルダで起きる犯罪の数々。

優秀な局員は本局勤め、本局の連中は次元世界の取締ばかりで、地上のことを蔑ろにする……。

予算も本局とは天と地の差。

そして何より戦友達を六年前に失い、己の正義を見失い広域次元犯罪者に指定されてるジェイル・スカリエッティに、違法研究をさせている自分に……。

「ワシの正義……あいつと交わした正義。 此処何年耐え続けて来た……自身の正義から目を逸らして来たが……もう無理だ。 そうとも、ワシはこんな事の為に上を目指した訳ではない!!」

長年の良心の責め、机に立てられてる自身と戦友の目に耐え切れず、レジアスは一人職務室で叫んだ。

そしてレジアスは、写真立てを見て一人呟く。

「ゼスト、メガーヌ、クイント……今更かもしれん……だが、今更だからこそワシは、あの頃の自分に戻ろうと思う」

人は、必ずしも正しい道を歩むとは限らない。

甘い言葉に負け、挫折を味わい道を外れる事がある。

しかし、人は道を外れても戻る事が出来る。

レジアス・ゲイズは、六年という月日を経て以前歩いていた道へ

と引き返して行つた。

そして遠い未来、レジアスは言う。

「あの時、引き返してて良かった」と……………。

三人称

葉生視点

今、オレの目の前に頭を下げてゐる小肥りの男が居る。

彼の名前はレジアス・ゲイズ。

なのは達が、働いてゐる時空管理局のお偉いさんらしい。

なんでもミッドチルダを救う為に、シャーマンの力が欲しいとか
なんとか……………。

「頭を上げる」

「……………」

オレが頭を上げるよう言い、レジアスは頭を上げる。

「ふむ、何故シャーマンを知っているとか、シャーマンの力をどう
利用するのかとか、どうでも良くなった。良いぜ、あんたの力に
なつてやる。精一杯オレをこき使え」

「ありがとう……………ありがとうっ！！」

何故オレが此処まで見知らぬ奴の為に言つかというと、単純にレ

ジアスの目が気に入った。
堕ちた濁った部分はあれど、それに負けない程の輝きを見たからだ。

以前聞いたリンデイの声、闇の書の中で見せられた人の業、そして転生前にハオから聞いた「愚かな人間」という言葉。

ああ、ああ、確かに人間は愚かだ。
道を踏み外し、外道と堕ちる奴らばかりだ。

転生前のオレも、そんな奴らの一人だったからよくわかる。
でもよ……人は引き返せる。

やり直せるんだ。

見てるか？ ハオ。人はこんなにも愚かだが、こんなにも愛おしい。

「だが、どうする？ レジラス。管理局が欲しいのは魔導師なんだろう？」

「っ！ それについては考えがある」

涙を拭き、オレの質問に答えるレジラス。

そしてレジラスの考えとは、以下の通りらしい。

シャーマンと言っても、オレにリンカーコアがあるとの事、ソレを利用してリンカーコアを持つシャーマンの部隊を創るらしい。

「つまりは覆面魔導師の部隊と？」

「ああ」

「となると数が居るな、わかった。 オレ以外のシャーマンに会わせよう。 だが……」

「わかってる。 ワシが全員口説く!」

「よろしい。 スピリット・オブ・ファイア!」

――ズガアアアンツ!!

「ぬうお!」

オレの後ろにスピリット・オブ・ファイアが現れると、レジアスは驚いたように声を上げる。

「つて、待て」

「ど、どうした?」

何故、魔導師じゃないレジアスが見える? 魔導師としての資質がないだけで、リンカーコアはあるのか?

「レジアス……確認の為に聞くが、オレの横に何が居る?」

「ん? 赤い鎧を着た赤髪の女騎士だが」

『ッ!! 葉生』

どうやらレジアスには、シャーマンとしての資質が高いようだ。スピリット・オブ・ファイアの霊力に触れて、才能が開花したかな? さっきの驚きはベビーから究極形態になった驚きだろう。

「OK、わかった。それじゃあ、行くとしよう」

「ああ……」

葉生視点

く第一廻く スカウト

葉生視点

レジアスを連れて向かった先は、ニューヨークのとある看護学校。此処には、三人のシャーマンが居る。

『彼女達に会うのも久しぶりですね』

そうオレに言ったのは、赤く染まったアルトリアだった。何故赤く染まったのか、これには深くも浅い事情があったわけ、とりあえず何処が赤いのかと言うと……金髪から赤髪へ、青いドレスは朱に染まり、手、足、胸にあった銀の鎧は深紅へと変わった。変わらないのは、性格と翡翠の瞳だけだ。

アルトリアが戻って来たのは、もう皆と別れたあと……唯一会ったのがマリオンだった。

『ええ……』

「葉生……」

「ん、なんだい？ レジアス」

「どうしても入らねばいのか？ 出来るなら連れ出して喫茶店か何処かで……」

レジアスが周りを気にしながら、小さく主張する。

まあ女子寮の前で、オレは完全に女子寮に入ってる……そんな状態だからわからんでもない。

女子しか居ない施設。

むさ苦しいおっさんに、ネイティブ・アメリカンの民族衣装を決め込んだ男が二人。

周りの女子からは不審に思われ、レジアスからしたら恥ずかしい、気まずいといった感じだろう。だが！！

「考えてもみる？ こっちは頼みに来てるんだ。 あっちから来てもらうのは筋違いだ。 それにこういう所では、堂々としてれば良いのさ」

「そ、そうなのか？」

『いや、私に聞かれても……』

オレの言葉を聞いても信じきれないのか、レジアスはアルトリアに確認するように問い掛けるが、アルトリアは困った表情をしながら答えた。

「ぐぬぬぬ……」

「レジアス……キミの正義は女子寮に堂々と入れない程、ちっせえものなのか？ だとしたら見込み違いだったかな」

「ッ！ そんな事はない！！ ワシは自分の正義の為なら……あいつと夢見た正義の為なら、女子寮に入る事くらい訳無い！！！」

事情を知らない者から聞いたら、どんな正義だ！ とツッコミが来る発言をしながら、ズンツズンと女子寮へ入って行った。

「ぶつくく……」

『意地が悪いですよ。 葉生』

良いじゃないか、これくらい。

それに、この程度で尻込みするんだったら、本気で協力するのを止めるつもりだったし……。

「おい！ 早く来んか！！」

おっと、いけないいけない。

レジアスに急かされるように、オレはレジアスの後を追った。

・・コンコン…

「はい、どちら様でしょう」

ドアをノックすると、聞こえてきたのは優しくも懐かしい声。

「麻倉葉生だ。 ちょっと…」

「ええっ！！ は、葉生！？」

「ちょ、ジャンヌ！ 葉生くんってホント！？」

「私が出て来るわ！」

「「抜け駆け禁止よ！ ミイネ！！」」

ジャンヌが驚いたあとに、部屋の中から潤とミイネの声が聞こえ、段々と慌ただしくなっていた。

「あゝ……元氣な事で」

『此処数年で、さらに争奪戦が激化したのでは？』

「とりあえず、後ろから刺されるなよ？」

アルトリアとレジアスの言葉が耳に痛い。

好いてもらってるのは嬉しい、嬉しいけどオレとしては良い人を見つけて欲しいよ。

シャーマンとして優秀な種を残す使命とか捨てて、さらに言えば落ち着きがないオレを見限って……。

「プーアル茶です」

「お構いなく……」

あのドタバタが収まったあと、オレ達は部屋に上がらせてもらい、レジアスをジャンヌ達に紹介した。

まあ、その時にアルトリアの事も一騒動はあったけど、それは今は関係ないので横に置いておく……。

さて此処からが本題、レジアスが掲げる正義。

それを受け止めて、ジャンヌ達が力を貸しても良いと言ってくれるなら良い、もしダメなら諦めるしかない。

「それで何用でしょう」

「急で、貴女方の未来を曲げてしまう話で申し訳ないが、ワシの正義について来て欲しい！！ 時空管理局地上本部へ、ミッドチルダに住む人々が安心して暮らせるよう……」

「……」

沈黙、まあそう簡単に事が運ぶとは思ってなかったし、この展開は当然だね。

「葉生は……葉生はなんと？」

「ミイネ、ジャンヌと潤もだけど……これはキミ達の意味で決めてくれ。オレが居るから、皆が居るからじゃなくね。レジアスの意志に、自分の意思で応えてやってくれ」

「ワシからも、お願いする」

「……ッ！！」「」

オレの言葉に、賛同するように言っレジアスにジャンヌ達は驚く。当然だろう。

力を貸してくれと言っておきながら、オレがついて行くとはいえ、
ついて来るのに、それに頼らないからだ。

レジアスが望むのは、レジアスの正義に共感する者だけ……。

「わかりました。 それでは一週間……時間をください」

「私にも……」

「わかりました。 では、一週間後……玄関の方に居ます」

こうして、最初の勧誘が終わった。

オレとレジアスは、すぐに退室して次の場所へと向かった。

ニューヨークからインド。

スピリット・オブ・ファイアのお陰で、素早く移動する事が出来
た。

そして、インドに居るシャーマンは一人。

悟りを開き、人々を救い導くシャーマンを目指す……サティ・サ
イガン。

闇の書事件の時に、オレを救った西岸サチである。

「サティ」

「葉生！ ……つとそちらは？」

「時空管理局地上本部所属のレジアス・ゲイズだ。 本日は貴女を

勧誘しに来ました」

「勧誘……」

サティが呟きながら、レジアスの言葉を返す。

そしてジャンヌ達に言った事を丸々偽り無しに言い、サティもまた考える時間が欲しいと言ってきた。

期限は三日で十分らしい……。

次に来たのは中国だ。

此処に居るのは、オレの友達にしてライバル。

ハオより、五大精霊が二つ……スピリット・オブ・サンダーとスピリット・オブ・レインを授かったシャーマンだ。

ちなみにオレは三つ。

一つはスピリット・オブ・ファイア。

一つはスピリット・オブ・ウィンド。

一つはスピリット・オブ・アース。

といつても、ウィンドとアースは預かってるだけだな。

まあそれは置いて、そんなハオに認められたシャーマンの名前は、道蓮。 潤の弟だ。

そして、蓮の他にも二人居る。

蓮の許婚である、カンナ・ビスマルクとマチルダ・マティスだ。

彼女達は一族の修行に耐え、さらには独自の修行法を編み出してジャンヌ達と同レベルまで行ったのだ。

そこから超・占事略決を教えたりと、さらに強くなった。

もつともそれは数ヶ月の天下で、すぐにサティとマリオンに抜かれたけどね。

「よく来たな。姉さんから聞いてるから説明は不要だ。結論から言つと、時間をくれ……明日には決めておく」

どうやら、サティから行ったのは正解だったかな。
ニューヨークから中国へ行ったら、潤の連絡は無駄になってただろう。

「もつとゆつくり決めても構わないんだが……」

「いや、蓮が明日までつて言つんだ。明日までに答えは出るような？」

「当然だ」

「それを聞いて安心した。さあ次で最後だ」

「あ、ああ……」

さて、問題はマリオンか……。
後に後にと考えてたら、結局は最後になったな。

「レジアス……最初に言っておく」

「なんだ？」

「最後の人物だが、どんなに言葉を並べようと、本人の意思というのは諦めた方がいい」

「どんな人物なんだ？」

「オレ至上主義。オレが居れば自分の考えを無視して、オレについて来る」

なんせ離れる時もギリギリまで迷ってたし、今でも声を掛けられ
ついて来るからなあ。

「……………どうすればいい」

「こればかりは、しょうがないさ」

如何にレジアスの言葉を聞き、自分で考えろと言っても、理由は
オレについて行くになるからな。

『良く言えば純真、悪く言えば陶醉……………小さなスピリット・オブ・
ファイアですからね。彼女は……………』

言うな、アルトリア。

イタリア。

とある場所にある、ぬいぐるみ店。

・・カランカラン

「いらっしやいませ、葉生様」

扉を開けると目の前に、長い金髪をツインテールにして、黒いワンピースを着たマリオンが出迎えてくれた。

「久しぶりだな。オレの言いたい事は……」

「わかってます。でも私は……」

「マリオンの事は、わかってるつもりだ。レジラス……」

「どうしてもダメか？」

「無理だ」

「わかった……」

「すまないな……」

レジラスに詫びて、オレはマリオンと向き合う。

「……………オレと共に来い。マリー」

「はい！」

ニッコリと、明るい笑顔を見せるマリオン。

まったく、変わらないな……。

葉生視点

↳ 第一廻 ↳ スカウト（後書き）

キャラクターのプロフィールって要りますか？

く第二廻く 答え

葉生視点

マリオンが暮らしてる部屋に、一晚泊まった次の日。
目を開けて隣を確認すると、やっぱりというか案の定というか、
マリオンが裸で寝ていた。

「……………」

「ん……………はおさまぁ」

起き上がろうとして体を起こすと、マリオンが腕に絡みついて動けない。

仕方なしに、横に置いていた菓子の蓋（当然、缶の）を手に取り

……………

――ガンガンガンッ！！

マリオンの頭に、容赦無く叩き付けた。

「……………ッ！？ 痛い……………」

「目の毒だ、パジャマくらい着ろ」

「はい」

こうやって毎度毎度注意して、ちゃんと返事するがマリオンは――

向に、パジャマを着てくれない。

ちなみにコレは旅に出て、一ヶ月頃から始まった事だ。

久しぶりに再会して直つてると思ったが、どうやらオレの考えが甘かつたらしい。

『元々、彼女を小さいスピリット・オブ・ファイアと評したのは、葉生ですよ?』

ああ、オレが甘かつたよ! 甘いよ! オレは!! だからそんな目で見るな、アルトリア!!

さて読者諸君、此处でスピリット・オブ・ファイアが嫉妬しないの〜とか思つかもしれんが、スピリット・オブ・ファイアが嫉妬するのは、他の霊とオレが親密になった時だけで、生きた人間同士が親密になるのが嫉妬はしない。たまにするが……。

と朝はバタついたが、あれ以降何事も無く、中国へと旅立った。

「よう、もう決まったのか?」

「ああ……」

「久しぶりね。 葉生」

「マリーちゃんも久しぶり〜」

「久しぶり、カンナ、マチルダ」

「久しぶり……」

蓮を挟むように居るカンナとマチルダに挨拶をして、三人の答えを待つ。

「俺達が入る事にした。俺達は互いが抑止力だからな、どちらかが傍に居ないとダメだろ」

「ああ、すまないな」

「ありがとう！」

「それで次は何処へ？」

「インドだけど……まだ時間があるから、蓮の所で一泊する予定だけど？」

「構わんぞ」

「いやあ、重ね重ね……ありがたい。」

「にしても、昔と比べて落ち着いたなあ……蓮の奴。これもハオのお陰か？」

《呼んだ？》

呼んでないけど、聞きたい事がある。

《なんだい？》

オレと蓮って、どっちが強いんだ？

《難しい質問だね。 巫力では蓮、靈力ではキミと言った所かな》

フムフム、なるほど……………オレの方が若干弱いつて事か。

《大正解》

わかった、ありがとう。

やっぱり五大神二体は、スピリット・オブ・ファイアを以^もってしても、厳しいらしい。

でも、大陰陽師の称号は伊達じゃない。

いつかは決着を着けないとね。

「親父、今日は葉生と他二名が泊まる事に……………」

- - ガヤガヤ

ん？ なんか騒がしくなった？

蓮が開けた扉を見ると、そこには数百体のキョンシーと巨人が居た。

そして壁には「義息子、歓迎」の文字があつた。

- - キイイ……………パタンッ

あ、扉が閉まつた。

「すぐにインドに向かうぞ」

「え？ いや、でも……」

「行・く・ぞー！」

「はい……」

というわけで、急遽インドへ向かうことになった。

「あれ？ 葉生に蓮、カンナ、マチルダ、マリー、レジアスさん」

インドに着いて、まず向かったのがサティが住んでる家。
本当は、明日の方が良いんだけどね。

「親父がウザかったから、すぐに来た」

「すまん、サティ」

「いえ、大丈夫ですよ」

サティの許可が出て、オレ達は家の中へ入った。
そのあとレジアスに声を掛けて、シャーマンの修行を課してみた。
しばらく見ていてわかったが、やはりレジアスにはシャーマンの
才能があるらしく、どんどんその才を開花させて行った。

「……………レジアス」

「ぬ、なんだ？ 蓮」

「お前、シャーマンキングの修行をしないか？」

「蓮？」

今まで黙って見ていた蓮が、レジアスにとんでもない事を言い出してきた。

シャーマンキングの修行。それは、オレと蓮が受けたモノだ。確かにソレを受ければ、レジアスの力は絶対的なモノとなるが、リスクが高すぎる。

「どうする？」

「それを受けれる程の力が、ワシにあるのか？」

「シャーマンの強さは、強靱な精神力だ。貴様の正義が本物なら、可能だろう（俺は葉生のような霊視は出来んからな。だから俺は俺のやり方で、貴様の正義を見極める）」

蓮の心の声が聞こえて来る。

そういった意図があるなら、オレからは何も言えない。

「そう言われては引けんな。受けよう！」

「良いのか？ ああ言うてはなんだが、アレは軽く死ねるぞ」

「構わん！」

「そうか……ならば、逝けい!!」

――ドオオオオオンッ!!

蓮はレジアスの魂を剥ぎ取り、すぐさまグレート・スピリッツへと送った。

あとはレジアス次第。

「さて、どうなるか楽しみだ」

「レンはどれくらいの期間、ハオの所に居たんだ？」

「三ヶ月だ。消滅しかかったのは、二回だったかな」

「マゾヒスト」

「黙れ、リア充」

――ブチッ

「許婚が居るツンデレに、言われたくないな」

「貴様は五人だな!」

「……………」

沈黙が部屋を支配する。
そして…………

- - ガキイイイインッ!!

「やるかああああ!?!」

オレはスピリット・オブ・ファイアの腕だけオーバーソウル化し、蓮はスピリット・オブ・サンダーの腕だけオーバーソウル化してぶつかり合い。オレ達も組み合った。

- - ガスッゴスッ!

「グハッ!?!」

「地球で、喧嘩こいしないように」

頭に強烈な痛みが走った。

翌日。

朝食を取ったあと、サティに呼ばれた。

「私もついて行く事を決めました」

「ありがとう。これからよろしく」

「はい」

これであとはジャンヌ達だけど、全くといっていいほど不安はな

い。

レジアスは不安で、一杯だったらしいけど……。

「ところで、スピリット・オブ・アースはどちらに？」

『さっき天に昇って行ったのを見たよ』

『私もです』

「担い手の所へ行つたよ」

「では……あの人が？」

「まだわからないけどね。あ、そうだ……あと三日くらい居座るけど良い？」

「ええ、どうぞ」

「ありがとう」

さて、残り三日。

ハオからの報告で、レジアスは頑張ってるらしいけど、大丈夫かねえ。

サティの所に泊まって、三日が経った。
レジアスは、まだ戻らない。

「どうしようか？」

「普通に連れていけば良いだろ？」

「いや、レジアスが起きてないと意味がないからなあ」

「……………やはり見極めるのは、見送ってた方がよかったか」

確かに、空気読めなさすぎの発言だったのは認めるよ。

アレは最低でも、一ヶ月は掛かるし……………。

でも、止めなかったオレも悪いっちゃあ悪いんだけどね。

《やあ、待たせたね》

「ッ！？ ハオ（シャーマンキング）！！！！」

《今からレジアスを帰すよ》

ハオから告げられた言葉の意味がわからずに、オレ達の思考が停止する。

三日だぞ？ 三日！！ いくらなんでも早過ぎるだろ！！

《急ピッチでやった！ 途中から泣いてたけど……………》

「ああ、わかる。 オレ（俺）も覚えがある」

レジアス……………強く生きれ！！

「それじゃあ、レジアスも戻ってきた所で行くのでしょうか」

「「「「「おー」「……」」」」」

「生きてる。こんなにも生きる事が、嬉しく感じるのは初めてだ。母さん、産んでくれてありがとうっ！！」

うん、一人だけなんか違うけど、今はソツとしておこう。
誰だって母親に感謝する時がある。
レジアスにとって、ソレが今日だったんだ。

というわけで、ニューヨーク。
ところで、みんなは知ってるかな？ ニューヨークって、漢字で書くと「紐育」こう書くんだ。
覚えておくと、なんか良いこともあるんじゃない？

「時にレジアスの持霊って何？」

「うむ、大地だ」

「大地？」

スピリット・オブ・アースじゃないのか？

「本来の名前は、スピリット・オブ・アースだが……長いから大地と名付けた」

「安直過ぎじゃないか？」

「う、うるさい！」

だいたいミッドって、欧風の名前だろ？ それだったらアースだけでも……

『『『『……『『『『

「ん、なんだ？ スピリット・オブ・ファイア、スピリット・オブ・ウインド」

「どうした？ スピリット・オブ・サンダー、スピリット・オブ・レイン」

『『『『……『『『『

「名前が欲しい？」

なんと言うことか……。

まさか、スピリット・オブ・ファイア達が名前を欲しがるなんて……。

いや、この場合は愛称か……。しかし、どうする？ 完全に予想外だ。パツなんて思いつかないぞ。

「スピリット・オブ・サンダーは雷公らいこう、スピリット・オブ・レインは靈龜れいきだ」

なんか蓮は、すんなりと言ってる。

ヤバイ、オレも考えないと!! それにしても雷公は良いとして、何故靈龜? 玄武が水を司るからか? 龜繋がり? でも四神の司る力って、ほとんどバラバラだよなあ。

青龍が司ってる時もあるし、うゝむ…謎だ。

「さつさと決めた方がいいぞ。スピリット・オブ・ファイアが嫉妬する」

『……………』

そうだった…………。

ヤバイ、考えろ! オレ!! 火、炎、太陽…………この三つを司る靈的名前。

カグツチは、没だな。

カグツチは、スピリット・オブ・ファイア自身を指す。

というか、五大神として名を連ねた今では、カグツチなんて下っ端辺りじゃないか?

「…………アマ」

- - ボウツ!

アマテラスですら納得いかない様子…………。

マジで考えねば、死ぬ!!

「はあ…(スピリット・オブ・ファイアだけの名前を決めれば良い

んだ。既存の火霊、火の神の名前を決めた瞬間、終わるぞ」

「……………その考えはなかった」

ならば、真剣に考えてやらないと失礼だな。

スピリット・オブ・ファイアを見て、連想する名前。

火琳^{かりん}、火煉^{かれん}、炎羅^{えんら}、炎湮^{えんり}。

これでは、火に囚われすぎか。

オレの名前を一字加えるとどうなる？

「炎生^{えんり}……………スピリット・オブ・ファイアの炎に、オレの葉生という
名前の生をくっつけて炎生と言うのはどうだろう？」

『……………』

スピリット・オブ・ファイアから、嬉しいという感情が流れ込んで来る。

うん、気に入ってくれたみたいで何よりだ。

ただし、心の中くらいではスピリット・オブ・ファイアで良いよな？ 真名は大事なんだし……………。

「あとはスピリット・オブ・ウィンドか……………」

どうせならスピリット・オブ・ウィンドにも、オレの名前を加えたい。

葉……………は、ば、ぱ、よう。

風……………かぜ、かぎ、ふ、ふう。

そしてスピリット・オブ・ウィンドの性別は女。

風^{ふう}＋葉^{よう}＝風葉^{ふうよう}

「風葉でどうだ！」

『……………』

うむうむ、御満悦の様子。

というか、読む人から見て五大神の感情ってわかるのか？ 三点リーダーだろ？

《その為に、キミが言ってるんだから良いだろ？》

まあな……。

さて考え事をしていたら、ジャンヌ達が居るではないか。
という事は……………

「ああ覆面魔導師部隊が完成したんだ！！」

レジアスの喜びに満ちた声が、周囲に響く。
周りの視線が痛い、今は祝福しておこう。

「さあて、此処から本腰を入れるぞ！ 会議だ、レジアス！！」

「わかってる！！」

葉生視点

プロフィール

葉生と葉生の持霊

名前：麻倉 葉生

性別／年齢：男／17歳

学歴：小学校 卒業

出身地：日本・海鳴市

巫力数（前回値）：125億402万（125億）

備考：各世界の靈山に登り、シャーマンキングであるハオの修行で17歳という若さで、大陰陽師へと成長を遂げた。

持霊1

名前：アルトリア・ペンドラゴン

性別／ランク：女／神

霊力数（前回値）：30億（20万）

媒介：酸素・エクスカリバー

戦闘スタイル：剣術・燃焼

備考：葉生の最初の持霊。

以前と違って姿が一変しており、新たな能力も手にしてる。

持霊2

名前：炎生^{えんり}

真名：スピリット・オブ・ファイア【究極形態】

性別／ランク：女／五大神

霊力数（前回値）：60億（-）

媒介：酸素・燃焼物・熱源

戦闘スタイル：燃焼

備考：葉生の為に誕生した二体目の五大精霊。

しかし凄まじい成長を見せて、五大精霊の枠に収まりきれずにシャーマンキングが、新たに五大神という枠を作る程。

ちなみに五大神は、その強力故か互いが抑止の存在となっている。

持霊3

名前：風葉ふよう

真名：スピリット・オブ・ウィンド

性別／ランク：女／五大神

霊力数：60億

媒介：空気・風

戦闘スタイル：気流、気体、気圧の制御

備考：五大神同士の抑止的存在。

葉生と葉生の持霊

蓮と蓮の持霊

名前：道 蓮

性別／年齢：男／17歳

学歴：中学校 中退（表向きは、転校）

出身地：中国・貴州

巫力数（前回値）：200億（102万4千）

備考：葉生のライバル的存在。
AS時、葉生との実力差が大幅に広がって以来、修行に明け暮れる
毎日を送っていた所、シャーマンキング直々に修行をつけてもらう
事にこぎつけた。

持霊1

名前：馬孫

性別／ランク：男／精霊

霊力数：10万6千

媒介：馬孫刀・宝雷剣

戦闘スタイル：刀剣術・雷を操る

備考：蓮の持霊。

道家に仕えてる武将の霊。

持霊2

名前：雷公ライコン

真名：スピリット・オブ・サンダー

性別／ランク：男／五大神

霊力数：60億

媒介：雲・宝雷剣

戦闘スタイル：放電・磁力

備考：五大神同士の抑止的存在で、シャーマンキングとの修行を受けてた蓮の魂に惹かれて、自ら蓮の持霊となった。
シャーマンキングもそれを許可している。

持霊3

名前：霊亀^{れいき}

真名：スピリット・オブ・レイン

性別／ランク：女／五大神

霊力数：60億

媒介：水

戦闘スタイル：浸透・溶解

備考：五大神同士の抑止的存在。

スピリット・オブ・サンダーと同じく、蓮の魂に惹かれて持霊になった。

これもシャーマンキングの許可が下りてる。

他にも、李書文や呂布などが居たが、蓮の修行に耐え切れずに、現在はグレート・スピリッツにて療養中。

蓮と蓮の持霊

ジャンヌとジャンヌの持霊

名前：アイアンメイデン・ジャンヌ

性別／年齢：女／17歳

学歴：医療専門学校 自主退学（表向きは、転校）

出身地：フランス・ロレーヌ地方

巫力数：1億760万

備考：葉生の許婚にして、神クラスのシャーマン。
葉生との関係は良好。

持霊

名前：シャマシュ

性別／ランク：男／神

霊力数：52万

媒介：拷問器具、アイアンメイデンの面

戦闘スタイル：審判（ほぼ死刑というか私刑が多い）

備考：神クラスの霊にして、絶対正義の権化とも言うべき存在。

その正義には一切の妥協を許さず、行ってきた審判の殆どが死刑（というか私刑）。

ジャンヌとジャンヌの持霊

潤と潤の持霊

名前：道 潤

性別／年齢：女／21歳

学歴：医療専門学校 自主退学

出身地：中国・貴州

巫力数：1億

備考：葉生の許婚で、キョンシーを操るシャーマン。
その実力は並のシャーマンでは、上位に食い込むというか巫力、戦闘技術から神クラスのシャーマンとなってる。
葉生との関係は良好。

持霊

名前：孫 明

性別／ランク：女／人間霊

霊力数：1000

媒介：自身の肉体

戦闘スタイル：肉弾戦

備考：潤の持霊にして、キョンシー。
彼女が使う戦闘技術は、中国の英霊達から得たモノで、よく好んで使うのは馬孫から教わった中華斬舞の亜種（格闘術）、中華乱舞。

潤と潤の持霊

ミイネとミイネの持霊

名前：ミイネ・モンゴメリ

性別／年齢：女／21歳

学歴：医療専門学校 退学

出身地：カナダ・モントリオール

巫力数：1億

備考：葉生の許婚。

当初はそれなりの実力者だったが、麻倉家で修行し、許婚同士と競い合う事で神クラスのシャーマンとして覚醒した。
葉生との関係は良好。

持霊

名前：ミカエル

性別／ランク：男／聖霊

霊力数：48万

媒介：光

戦闘スタイル：剣術・レーザー

備考：機械天使ではなく、本物の天使。
天国のコミュニケーションで、他のコミュニケーションを管理してる時にミイネと出会い持霊になった。

ミイネとミイネの持霊

サティとサティの持霊

名前：サティ・サイガン

性別／年齢：女／20歳

学歴：小学校卒業

出身地：日本・東京

巫力数：50億

備考：葉生の許婚。

許婚の中でも一位、二位を争う程の実力者だが、温厚な性格から戦う事を嫌う。

葉生との関係は良好。

持霊

名前：ダイニチ

性別／ランク：男／神

霊力数：70万

媒介：腕釦わんせん

戦闘スタイル：大仏パンチ

備考：サティとの修行で、宇宙からの力を受けてセンジュがダイニチへと昇華した。

その強大な力故か真の姿では、世界が壊れるため、何百万分の一にまで抑えてオーバーソウルになる。

サティとサティの持霊

マリオンとマリオンの持霊

名前：マリオン・ファウナ

性別／年齢：女／16歳

学歴：小学校 卒業

出身地：イタリア・ナポリ

巫力数：100億

備考：葉生の許婚。

サティとタメを張る程の實力を持つシャーマン。

葉生の為ならなんでもし、何に置いても葉生、葉生、葉生。

これほどマリオンが葉生を執着する理由は、実の所マリオン自身よくわかっていない。

葉生との関係は良好だが、周りから見たマリオンは異常の一言。

持霊1

名前：キッド

性別／ランク：男／人間霊

霊力数：750

媒介：西部のガンマン人形

戦闘スタイル：銃撃

備考：マリオンの持霊。

持霊2

名前：・

性別／ランク：／

霊力数：0

媒介：無し

戦闘スタイル：無し

備考：霊力0という異常な霊（霊とすら呼べるかわからない）。
マリオンすら知らない何か。
葉生もシャーマンキングすら気付かない何か。詳細は不明で、おそらく表には一生出てこない。
しかし、マリオンの葉生の執着の原因はコレ。

マリオンとマリオンの持霊

カンナとカンナの持霊

名前：カンナ・ビスマルク

性別／年齢：女／20歳

学歴：高校 卒業

出身地：ドイツ・ザクセン

巫力数：1億3千

備考：蓮の許婚。

当初、葉生の許婚達とは仲が悪かったが、今では仲が良い。
蓮との関係は良好。

持霊

名前：アシクロフト

性別／ランク：男／人間霊

霊力数：1700

媒介：煙

戦闘スタイル：槍術

備考：カンナを守護する老騎士。
その実力は鎧を纏った状態でも、孫明を凌駕する。

カンナとカンナの持霊

マチルダとマチルダの持霊

名前：マチルダ・マティス

性別／年齢：女／17歳

学歴：中学校 中退（表向きは、転校）

出身地：イギリス・スコットランド

巫力数：1億

備考：蓮の許婚。

彼女もカンナ同様、葉生の許婚達と仲が悪かったが、今では仲が良
い。

蓮との関係は良好。

持霊

名前：ジャック

性別／ランク：男／人間霊

霊力数：1500

媒介：カボチャ人形

戦闘スタイル：ナイフ

備考：マチルダの持霊。

イギリスで恐れられてた連続殺人犯。

マチルダとマチルダの持霊

レジアスとレジアスの持霊

名前：レジアス・ゲイズ

性別／年齢：男／52歳

出身地：ミッドチルダ・――

巫力数：70億

備考：今更、正義を取り戻した男。

長年の良心の責めに耐え切れず、しかし自壊せずに引き返すという強い精神を見せた。

その精神の強さ、正義は、葉生、蓮、ジャンヌ、サティと言った最強のシャーマン達に認められ、さらには大地を司りし五大神、スピリット・オブ・アースにも認められる程。

持霊

名前：大地

真名：スピリット・オブ・アース

性別／ランク：男／五大神

霊力数：60億

媒介：土・石

戦闘スタイル：重力操作・地震、地割れ等の土と岩関連の災害

備考：五大神同士の抑止的存在。

レジアスの強さに惹かれ、自らレジアスの持霊になった。

レジアスとレジアスの持霊

く第三廻く 結成、特務部隊！（前書き）

後半、時間飛びます。

ぶっちゃけ、やっちゃった感バリバリ？

く第三廻く 結成、特務部隊！

葉生視点

さて仲間が集まった事で、作戦会議とやらを開かねばなるまい。
という事でやって来ました、ミッドチルダのとある一軒家。
門前にあるポストには『マクレディッツ』の名前があった。

「誰の家だよ」

「会えばわかる。 というか、驚く」

ニヤリといった感じで、レジアスは笑う。
悪い代官がやりそうな表情とは、死んでも言えんな。
実際、悪の代官並だったらしいし……。

「悪人面した笑いね」

- - グサリッ！

言つのを躊躇^{ためら}ったオレに反して、ミイネの言葉の剣がレジアスに
刺さった。

「……………ぐすっ」

オレ達（ミイネを除いた）は、ミッドの空を見てレジアスに激励
を贈った。

「頑張れ」と……。

とりあえず人の家の前で、何時までも居るわけにもいかず、オレはインターホンを押した。

・・ピンポッ

「はーい」

「……」「ッ！」「……」「」

チャイムの音が短いと思うよりも、聞こえてきた声にオレ達は驚く。

子供っぽさを残した声。

今でも思い出せば甦る……ゲームを片手に「はーい」と、こちらに向かって走ってくる金髪の女の子。

一度は命を落とし、シャーマンの秘術を持って、生き返った少女。

「どちらさまーって、はーい！ レンー！」

「アリシア・テストロッサ……」

前と比べて、いろいろと大きくなったアリシアが、ドアを開けて出て来た。

なんか……物凄い違和感がある。

「何故、此処に居る」

「それはこっちのセリフだよ」

アリシアの言葉に、此処へ案内したレジアスの方を見る。

するとレジアスは「どうだ、驚いただろう？」と、言わんばかりのドヤ顔をかましてた。

「レジアス……まさかオレ達の存在を知ったのは……」

「そうだ……プレシア・テストロツサからだ。今ではプレディア・マクレディッツと名乗ってるがな」

レジアスの言葉に納得する。

そして、無理矢理聞き出したわけじゃ無い事も……。

「あ、おじちゃん」

「元気にしてたか？ アレシアちゃん」

「うん！」

アレシア……今のアリシアの名前なんだろう。

しかし……こうして見ると、アリシアとレジアスが援助交際してる風にしか見えないんだが……。

「まるで援助交際してる人みたい……」

――ズキュウウンッ！！

「ガハッ！」

オレが思っていた事を、今度はマリオンが言葉の銃弾でレジアスを貫いた。

頑張れ、レジアス！ 正義のために！！

「アレシア……でいいのか？」

「うん、いいよ。それで何か……あ、母さん？」

「うん、まあそれもあるが……中に入っても良いか？」

「良いよ」

アレシアに感謝して、オレ達はマクレディッツ家に入って行つた。此処でプレシア……今ではプレディアか？ あの人が前のまま若い状態を保っていたら、誰かが言つだらうなあ……不倫してるみたいと……。

「誰か来たの？」

「うん！ おじちゃんとはお達し！」

「ッ！！ そう……とうとう来たのね」

扉の向こうで聞こえてきた会話を推測するにあたって、どうやらオレ達に来る事は想定内だったらしい。

ならばと、オレ達は扉を開けてプレディアの前に現れる。

「久しぶり、プレシア……いや、プレディアって言った方がいいかな？」

「ええ、プレディアの方にして……そして、久しぶりね。葉生、男前になったわね。蓮も……」

「老けてると思っていたが、ますます綺麗になったんじゃないか？プレディア」

プレディアの言葉に機嫌を良くしたのか、蓮もプレディアを褒めたたえる。

許婚を前によく言えるモノだな。

「ありがとう、蓮。で、葉生は何も言ってくれないのかしら？」

「オレは蓮と違って、ジャンヌ達の前で女性を褒めない。無いと思うが、後が怖い」

「そう……それは残念」

「それじゃ、蓮を借りてくよ」

「ガシッ！」

「ん？」

「話はマリーちゃんにでも聞くからさ」

「ガシッ」

「ぬ？」

カンナとマチルダに両腕をガッチリホールドされて、マクレディ
ツツ家を出て行く三人。

笑いを堪えてるプレディアを見る限り、アレはオレの許婚達も焚
き付けようとしてたのだろう。

命拾いした。

「あ、私はレンの所へ行ってくるー」

「気をつけるのよ」

「はい」

そして今まで見ていたアレシアも、慌てて蓮達の後を追いつける。

「アレシアも変わらないな」

「当然よ。 女の愛は、そうそう冷めたりしないわ」

アレシアが蓮の事を好きになったのは、闇の書事件の時だった。

オレが倒れ、フェイトも倒れて元気が無くなったアリシアを蓮が
元氣付けた事から、好きになったらしい。

で、闇の書事件が解決したあと、告白しようと頑張ろうとするも、
中々告白出来ずにミッドチルダへ引っ越す事になった。

そのあとは、手紙のやり取りを繰り返してるが、まだ好きだった
とは驚きだ。

「現代社会を生きる女性の愛は、そうそうに冷めるんだけどなあ」

「それは本当に愛してないだけ……」

「そうか、まあ話はこれくらいにして、レジアス……会議を始めようか」

「あ、ああ……」

プレディアの話をそこそこに、残りのメンバーで会議を始める事にした。

まず始めにやる議題は……

「管理局は警察や軍みたいに訓練校があるんだろ？ いきなり部隊を立ち上げるのは無理だと思うが……」

「そこについては、ワシの推薦として訓練校に行かず、一般局員としてすぐに働かせる事は出来る」

オレの疑問に、レジアスは問題ないと主張する。
しかし、問題はまだまだある。

「それでも部隊をすぐに立てる事は……」

そう、部隊の建設。

推薦で入った人間同士が、固まって部隊を作るのは無理がある。

「それに貴方のバックに居る最高評議会……」

「最高評議会にとって、レジアスさんは替えの利くの駒だしね」

潤さんの言葉に頷く全員。

一番の問題といったら、最高評議会なんだよなあ。

出世欲がある人間に、地上本部のトップの座をチラつかせ、^{なび}靡いたところでレジアスを切り捨てる。

「……………」

それを十分に理解してるのか、レジアスが黙る。

「仕方ない気が滅入るが……レジアス」

「なんだ？」

「今まで通りとは言わんが、最高評議会の下で働け」

「……………スパイか？」

「そうだ、お前の正義は地上の平和だ。あっちがお前を利用する
なら、お前もあちらを利用すればいい。目を付けられない程度に
な」

「……………それしかない、か」

「相手は時空管理局のトップだからな」

レジアスにとっては、取りたくない策だろうが、トップを相手に
^{たんか}啖呵を切れば即退場。

レジアスは闇を知りすぎてるからな……。

「不本意だが仕方ないか……………」

「となると急にレジアスさんが、私達を推薦入隊させるのはおかしいわね」

「それならワシの娘がある。娘はワシの副官だから、推薦は可能だ」

「他にも仲間が必要だな……」

「他にレジアスさんの味方はおられないので？」

ジャンヌがレジアスに聞くと、レジアスは汗を滝のように流して、オレ達は理解した。

居ないんだな、味方。

「！ そうだ、話せばわかってくれる奴が居る！！」

「ほう……誰だ？」

「陸士１０８部隊部隊長、ゲンヤ・ナカジマだ！」

というわけで、陸士１０８部隊に行って来ました。

「あんたらが、レジアス少将が言ってた奴らか？」

「はい」

「ふうん。まあ俺はレジアスがどう変わったかなんて、信じちゃあいなかったが……あんたらのような目をした奴が、腐ったあいつに付くわけが無い。レジアス少将からは俺が言っておくよ」

「ありがとうございます」

ジャンヌが頭を下げると同時に、後ろに居るオレ達も頭を下げる。

これで入隊して、すぐには行かないが部隊を設立出来る。
とりあえず、数ヶ月は此处で働く事になるかな……。

「あ、そうそう……部隊を建てなくても、新たに部隊が設立するって話なんだが……入ったらどうだ？」

と、此处でゲンヤが爆弾を落としてきた。

「確か部隊長の名前が八神……」

「いえ、私達は地上の治安を守る部隊として建てるので……」

あの会議が終わったあと、プレディアが話してきた。

遺失物管理部機動六課、被害者への謝罪が終わって、管理局が行う裁判で贖罪しゅくざいとして管理局に無償で働く事になった八神はやて。

贖罪が終わっても管理局で働いていて、今では新しい部隊を立ち上げて人を集めてるとか……。

フェイトにも話が来てるらしいが、フェイトは管理局がやってる違法行為の証拠を集めながら、執務官の仕事をしてるため……はやての誘いを蹴っただけらしい。

いやはや、頑張ってるねえ。

「そうかい、まあ一緒に仕事する時は頼む」

「こちらこそ」

こうしてレジアス、オーリス、ゲンヤの地上本部で有名な三人の協力を得て、オレ達はなのはとはやてらの目をかい潜り、管理局へ入隊した。

オレ達の入隊を知ったのは、フェイトだけだった。

さらに知ったのが、プレディアでもアレシアでもなく、レジアスが使った連休が不自然だと感じて、調べたらってオレ達の存在が出たらしい。

フェイトの調査能力に、戦慄したオレだった。

そして時が流れ一年足らずで、オレ達の部隊が完成した。

後見人がオーリス・ゲイズ三佐しか居ないが、魔導師ランクの低い者が集まった部隊と言うことで、一人だけでも許可がおりた。

そして前々から、部隊を立ち上げるために頑張ってたはやては、一年足らずで設立されたオレ達の部隊を見に来て、久しぶりの再会をした。

葉生視点

〽第三廻〽 結成、特務部隊！（後書き）

これから原作介入まで、地上の犯罪者を逮捕しまくります。

く第四廻く 新米部隊長

葉生視点

部隊の堅苦しい挨拶、他の地上部隊への挨拶を一通り終えて、特務部隊に宛てがわれた部屋に行くと、そこには書類の山が部屋を埋め尽くしていた。

「なんだ、これ」

「我らが特務部隊の仕事」

書類の山から顔を出した蓮が、オレの疑問に答えた。

よく見ればジャンヌもサティも潤、孫明、ミイネ、カンナ、マチルダ、他のみんなも書類を捌いてる。

そしてマリオンは、ガンマンのぬいぐるみで遊んでいた。

「マリオンはしないのか？」

「難しい……」

難しいって、オレが中学で習う事は教えただろうに……。

一枚の書類を取って、内容を確認すると中学生でも出来る物だった。

「マリー……」

「……………頑張る」

「それでよし」

さて、オレも始めるとしようか。

隣の部隊長に宛てがわれた内部屋の扉を開けると、真っ白な壁があった。

よく見ると線らしき物があり、火を点せばよく燃えそうじゃないか……………。

「……………蓮」

「それは部隊長の仕事だ」

「特務部隊のトップに」

「数秒前に失せたから、貴様のままでいい」

なるほどなるほど……………。

フッしようがないな……………。

「憑依合体……………」

「……………「！？」……………」

オレの呟きを聞いて、全員の視線がオレに突き刺さる。

何を驚いてるか知らんが、オレ達はシャーマンだ。

シャーマンならシャーマンらしく、霊に頼るべし……………。

事務処理が得意な霊と憑依合体したオレの身体は、霊の書類処理能力を使って捌いていく。

そして一分後には、部屋に溜まった書類は二割を終えた。

フツ一步だけ、部屋に入れたぜ。

「『なんて言ってる場合じゃないな。一步で感動してどうするよ。』
というか設立して、なんでこんなにあるんだ?」

「なんでも各部隊の書類処理が間に合わなくて、どうしようか知恵を絞った結果……新設した部隊に各部隊の処理10%押し付け……手伝わせようって話になったらしいわよ」

二つ目のオレの疑問に答えたのは、潤さんだった。

「というか10%って、多過ぎじゃないか?」

『事件発生、特務部隊は陸士108部隊と共に出勤してください』
早速特務部隊にも出勤要請が出たが、オレ達はぶっちゃけそれどころじゃない。

「『……マリオン、頼んで良いか』」

「はっ!」

「私も出ようか?」

「『頼む』」

「了解」

故に現状抜けても大丈夫なマリオンと、保険にマチルダを二人しか出せないがこれで良いの……か？

しばらく書類処理をしてると携帯が鳴り、出てみると108部隊の指揮官からふざけてるのかとお叱りを受けた。

「うちの連中が何か？」

『何か？ ではない！！ なんで二人しか出してこんのだ！！』

「と言いましても、こっちも大量の書類仕事がありまして、出せる人材が二人くらいしか……」

『せめて一個小隊は出せ！！』

おいおい、こっちは各部隊の援軍部隊のようなモノだぞ？ 小隊丸々出したら、他の援軍に行けねえよ。

「そういえば、事件ってなんですか？」

『アア？ 立て籠もりだよ！ 人質も居るって話だが……』

「それくらいでしたら二人で、いや一人で十分ですよ」

『何を馬鹿なつて、おい金髪！ 何処へ……』

- - ガシャアアアアンツ！！

『何やってんだああああああ！？』

電話の向こうで何かが割れる音がして、そのあとに108部隊の指揮官の怒声、さらに銃の発砲音が聞こえる。

状況を察するにマリオンが侵入の為、ガラスが何かを割って、驚いた犯人もしくはマリオンがオーバーソウルを発動して、発砲したって所だろう。

『葉生部隊長、今マリーちゃんが敵を捕まえて万事解決！ 人質に怪我はありません！ 以上、現場からでした』

『あ、こら勝手に…』

…ブツ、ツーツー

「現場の方はどうでした？」

「ゲンヤさんからどやされそう……」

「……………」愁傷様です」

ジャンヌの問いに答えたら、マリオンが何をしたのか想像出来たのか、ジャンヌ達から哀れみの視線を受けた。

実はマリオンの暴走というか、独断行動はゲンヤさんがいくら注意しても直らず、最終的にオレが注意を受ける始末。

そして今回……今度はマリオンを行かせた上司の責任として、注意を受ける事間違いない……。

「マリオンを行かせたのは、まずったかなー」

『事故が発生。 特務部隊は……』

「サティとジャンヌよろしくー」

「了解」

「わかりました」

二人に行くよう指示しながらも、書類を処理し続け、さらに部隊をどう分けるかを考える。

まずは蓮を隊長に、潤、孫明。

次にジャンヌを隊長に、ミイネ、カンナ。

最後、サティを隊長にマリオン、マチルダ。

このオーダーを基本に、他のバリエーションも考えてた方がいいかもな。

そんな事を考えながら、部隊長の部屋に集まっていた書類は片付いた。

「あとはこれを各部所に送るだけか……。 誰かオレの部屋にある書類を各部所に送ってくれ」

「わかりました」

「終わったなら、こつちを手伝ってくれ」

「はいはい…」

オレの部屋にある書類は、紫色の髪をした一般局員に任せて、オレは蓮達がやってる書類に手を出した。

『海上で事故が発生……』

「海上なら蓮だけで十分か？」

「ああ、任せろ」

「じゃあ、よろしく」

と、こんな感じで最初の仕事は終わった。

ちなみにこの事をレジアスに言ったら、もう少し部隊の動かし方を覚えろと言われた。

そして案の定、ゲンヤさんからお叱りを受けた。

葉生視点

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4471z/>

特務部隊はシャーマン！？

2011年12月20日18時49分発行